

なぜか追悼、辻井喬

6

1

追悼、などというのは
ちよつとおこがましい
一度も彼に会ったことがないし
作品の熱心な読者でもなかった
しかし「樹林」(13年12月)の特集や
「現代詩手帖」の追悼号を読んでいるうち
なぜだろう なつかしさのようなものを感じた

例えば山本勝夫によると
吉井勇 北原白秋 川田順らの歌はいい、
と辻井は語ったことがあるという
わたしも彼らの歌が好きだ
実は高知の山間、猪野々の里に
吉井勇は失意の一時期を仮住まいしたことがあり
そこに小さな記念館が建っている
訪れると あの「ゴンドラの唄」の切ない曲が流れるのだ
作詞したのは吉井だ

いのち短し 恋せよおとめ
朱きくちびる あせぬ間に

この歌を辻井も好きだったのではないか
黒沢明の映画『生きる』の中で志村喬が口ずさんだように

7

「現代詩手帖」14年2月号 飯島耕一・辻井喬追悼特集――
その座談会からいくつかの発言を拾ってみる

吉田文憲「基本的に飯島さんも辻井さんも散文行分け詩と言ってもいいような、歩行の感じがあるんです。ぼくが物足りないのは、辻井さんに関して北川さんがおっしゃったように、詩に対する疑いがない。文化の普遍的な価値を信じている。伝統といううな大きなものに自分の感受性がつながっていないと個別のうえにいいものがないんだという言い方もしています。」

野村喜和夫「飯島耕一の発する言葉は世代を代表できる。辻井さんの『わたつみ 三部作』は死者の鎮魂として機能する。言葉が広い意味での公共性を持ち、自分が発話することが何かを代表、代行するような、ある意味幸福なポジションがあつた気がするんです。」

蜂飼耳「詩がそういうものであれたということは振り返ってはつきり見えるんです。ただ、下の世代は逆にそこに言葉のリアリティを感じにくい。詩にそれをさせてしまうと言葉に空虚な感じを受けるようになり、それぞれ個別化していった結果、いまこの現状がある。しかし、昔はそうだったと単に振り返って終わるべきではないと私は思っていて、まさにその接続を探さないといけない。……でもその接続はとても難しいなと感じますね。」

北川透「……むろん、辻井さんは、これまでの大義、あるいは大義

そのものを否定するけれども、大義を求める生き方自体は美しいということでも否定していません。大義のあるものは、意味を失うとともに、美的な価値に変わっているんでしょね。」

四人それぞれに辻井の作品を読み

現代における詩の大事な問題にもふれている

3

詩作にむかう辻井の苦しみの中心は

どこにあったのだろう

一言でいえば現代社会の虚妄、ということか

大君のために「鬼畜」と戦い 南海の美都久屍となった若者たち

あの経験を無にするかのような今の日本の在り方

辻井も堤清二の名でかわったマーケティングや

グローバリズム（アメリカ化）のもたらす深い矛盾、など

ここで 最近のあるインタビュー記事を思い出す

渡辺京二「生きづらい世を生きる」（朝日新聞、13・8・23）

「あらゆる意味づけが解体され、人が生きる意味、根拠まで見失って、ニヒリズムに直面しているではありませんか。」

「根本には、高度資本主義の止めどもない深化があると思います。……お金を払えば（何でも）済むわけですから便利ではあるんですよ。だけど人間はバラバラになってしまふ。資本主義は一人一人を徹底的に切り離して消費者にする。……生きる上でのあらゆる必要を商品化し、依存させ、……」

「人は何を求めて生きるのか、何を幸せとして生きる生き物

「なのか、考え直す時期なのです。」
そういえば3・11の原発事故
その直後から早くも原子炉再稼働の声が出てくる
万一のことが起こっても 「金を払えば済む」――
このような発想ばかりが横行する今の社会を
詩人、辻井喬は苦しんだのではないか
済む、とはこの場合
大事なものを切断することである

4

ところで

わたしが追悼特集を読んだのは'14年2月4日
まだ暗い午前4時ごろから
いつものことで早く目が覚めてしまった
夜が明けて朝食をとっていたら なんと！
NHKアーカイブス「トルストイ ユートピアの大地
辻井喬の巡礼」をやっていた
「巡礼」は二〇〇一年のことらしい
人は何を求めて生きるのか 何のために生きるのか、
を追求しつづけたトルストイの生涯
その非戦と愛の思想に共鳴する農民たちが
小さなコミュニケーションを形成して 自分たちの労働と歌に生きる
やがて教会や国家から破門弾圧を受けた彼ら
今はみるかげもないその子孫たちの

暮らしの現場を辻井が訪ねるといふ番組である
例えば

ユートピア伝説のふるさと シベリア

ここはかつてデカブリストたちが

ロシアの専制と農奴制の廃棄を求めて武装蜂起し

徒刑ないし流刑となった地でもある

彼らの後を追って妻たちは

貴族の身分を捨て

はるか遠くバイカル湖のほとりへと向かう

このような場面は 「大義を求める生き方」として

辻井の胸を揺さぶったにちがいない

バイカル湖でよく捕れるという魚を手にしながら

「彼らはこの魚を食べながら

革命の思想から生活の思想へと
心を向けたんでしょね」
辻井はつぶやくように語っていた

5

『自伝詩のためのエスキース』（'08年）から
すこし引用してみよう

そんな時 むかし見たのは漂泊者

あるいは都を捨ててゆくさきさきで相聞歌を詠む男

しかし今では数えきれない顔のない勤め人